

韓国語を母語とする日本語学習者の 敬語使用における知識と運用

宮 岡 弥 生*
玉 岡 賀 津 雄**
林 炫 情***

1. は じ め に

海外及び日本国内において日本語を学ぶ外国人の数は、その増加率に若干の変動があるものの、増加の傾向にある。留学生政策懇談会では、留学生10万人計画は今後も目標を変更することなく、さらに推進してゆく方針であるとしており、日本への留学のためには、外国語による教育プログラムをある程度普及させたとしても、一般的には日本語能力が不可欠であるとの認識を示している（留学生政策懇談会、1997；文部省学術国際局留学生課、1997）。そこで、より効率的な日本語教育プログラムの開発が課題となっている。教育の効率を上げるためには、日本語学習項目のうち、学習者にとって難しいとされているものに焦点をあててプログラムおよび教材の開発を行う必要があると考えられる。

外国人が日本語を学習する際に、助詞と並んで難しいと言われているのが、敬語である（辻村、1989）。外国人日本語学習者の中には、敬語は日本人との交流に役立たないと考えている者もいる（母、1999）。実際、日本語母語話者にとっても人間関係などを考慮しながらの敬語運用は煩雑であるため、敬語に対して否定的な意見もある（田中、1999）。しかし現実の問題として、少なからぬ他者と関わりあいながらの、現代日本語による言語生活において、敬語を全く使わずにすませることは、煩雑さを回避できるという利益以上の不利益を、話し手にもたらすことになるであろう。『国語に関する世論調査 平成11年1月調査』（文化庁文化部国語課、

* 広島経済大学経済学部講師
** 広島大学留学生センター教授
*** 広島大学外国人客員研究員

1999) では、「敬語を使うべきときに敬語を使わないで話すのは、感じが良くない」と答えた人の割合が、80.8%にも上った。つまり、日本国内で主に日本語を用いて生活する場合、円満な人間関係を保ちたいのであれば、敬語を無視することはできないということである。外国人が敬語を用いる場合には、日本人が用いる場合よりも聞き手である日本人は寛容である(宮岡・玉岡・浮田, 1999)とはいえ、外国人であれば敬語を全く使わなくてもいいということではない。したがって、現在求められているのは、学習者の負担を最小限にとどめることのできる、適切かつ効率的な敬語教育の方法を確立することであると言えよう。

その際に重要なのは、まず、聞き手に受け入れられやすく汎用性が高い敬語を選定することであろう。これまでの研究では、初対面の女性が用いる敬語としては、話し手が日本人の場合も外国人の場合も、丁寧度の高すぎる敬語よりもむしろ、丁寧度のさほど高くない「レル敬語」を用いた表現の方が聞き手には好まれるということが明らかになっている(宮岡・玉岡・浮田, 1999; 宮岡・玉岡, 2000)。

さらに日本国内に焦点を絞って日本語教育の現状を見ると、中国語系および韓国語系日本語学習者の占める割合が、半数を超えている。したがって、研究の対象を中国語系および韓国語系日本語学習者とすることが、日本国内における外国人日本語学習者の敬語教育にもっとも貢献することができるものと思われる。

日本語教育の立場から、中国語系日本語学習者を対象に質問紙調査を行い、尊敬語と謙譲語の習得について人間関係の把握と文法事項のどちらがより難しいかに焦点を絞って行った分析では、中国語系日本語学習者は人間関係の把握よりも文法事項の方が質問紙調査の得点が低いという結果であった(Miyaoka & Tamaoka, 2001)。また、日本語能力別に分析および考察を行った研究(Miyaoka, Tamaoka & Bu, submitted)では、尊敬語は初級から中級にかけて習得の伸びが見られるが、謙譲語は中級以上にならないと伸びが見られないことが明らかになっている。また、母語に敬語体系をもたない中国語系日本語学習者と、敬語体系をもつ韓国語系日本語学習者のうち、上級レベルの日本語能力を有する学習者を対象に尊敬語と謙譲語のテストを行い、母語の影響を検討したところ、上級レベルになると、敬語の習得に対する母語の影響はなくなることが明らかになった(宮岡・玉岡, 2002)。

2. 「言語知識」と「言語運用」

「言語知識 (linguistic knowledge)」と「言語運用 (linguistic performance)」は、厳密に区別する必要がある。「言語知識 (linguistic knowledge)」とは、「言語を実際に使用する場合、背後にあってその使用を可能にしている知識体系である」

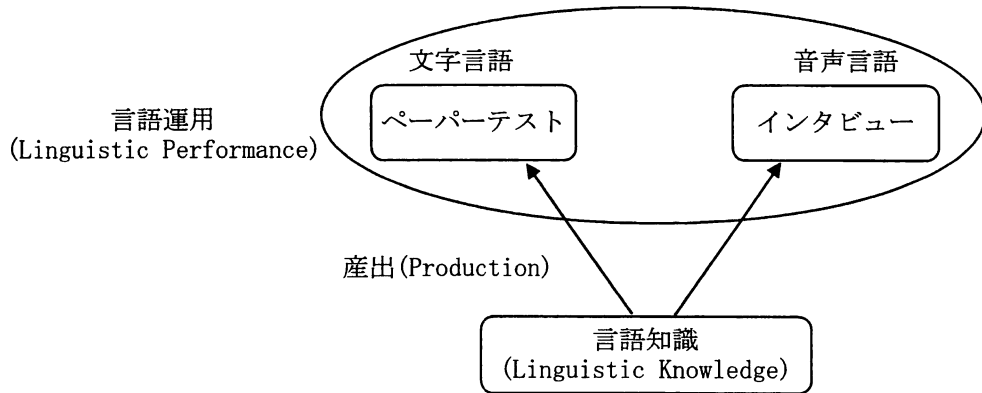


図1 言語知識と言語運用としてのペーパーテストおよびインタビューの関係

(中村・金子・菊地, 1989, p. 9)。一方, 文字言語としての「書く」行為, または音声言語としての「話す」行為はすべて言語知識をもとにして産出されたものであり, これらの行為は「言語運用」である。したがって, 言語習得の遅延には, 言語そのものの知識に問題がある場合と, それを使う運用力が欠けている場合がある。

日本語教育などの第二言語教育の現場においては, 「書く」行為はペーパーテストで, また「話す」行為はインタビュー形式の会話テストでその能力が測定されることが多い。言語運用が, 言語知識を基にした言語の産出 (production) であると考えれば, ペーパーテストとインタビューは同質のものとなる。つまり, 図1に示したように, 文字言語としてのペーパーテストも音声言語としてのインタビューも, 同じ言語運用であると考えられる。そして, それら言語の産出を司るのが言語知識である。この構図は, 会話を聞いて理解したり, 書かれたものを読んだりする言語の知覚 (perception) においても同様に機能すると考えられるが, 図1は産出のみを描いている。

日本語教育などの第二言語教育の現場において, ペーパーテストの得点は高いが会話は不得意だという印象を周囲から持たれている者が少なからずいることがしばしば指摘される。これを図1に則して考えると, 同じ言語運用であっても, 文字による言語表現はある程度できるが, 音声による言語表現が苦手であると言えよう。つまり, 両者の違いは, 言語知識そのものではなく, 言語運用を作り出している媒介と環境にある。ペーパーテストでは, 直接に (間接的にはありうるが) 他者の存在を意識する必要はないが, インタビューでは他者の存在が大きく関与してくる。この媒介と環境の違いが, 言語運用の2つの側面にどのように影響するのであろう

か。本研究では韓国語を母語とする日本語学習者を対象として、尊敬語と謙讓語からなる敬語のペーパーテストとインタビュー実験を行い、比較検討した。本研究によって、日本語学習者における敬語使用における言語媒介と環境の違いが明らかになれば、日本語学習者の特性や到達目標に応じた、適切かつ効率的な敬語教育プログラムおよび教材の開発が可能となるであろう。

3. 実験の手順

3.1. 被験者

本研究の被験者は、韓国語を母語とする日本語学習者24名である。被験者の性別は、男性が7名、女性が17名であった。年齢は、最も若い日本語学習者が20歳6ヶ月、最年長の日本語学習者が38歳5ヶ月であった。平均年齢は29歳8ヶ月で、標準偏差が4歳5ヶ月であった。これらの被験者は、すでに日本の大学または大学院に入学して勉強および研究に従事している。日本語能力は中級以上で、超上級も含まれており、日常的に日本語を用いて生活している。24名の被験者に対して、文法と語彙を問う穴埋め式の50点満点の日本語能力テストを行った。その結果、最高点が42点で最低点が6点という幅で、平均が28.00点、標準偏差が11.17点であった。日本語能力には得点にかなりの分散がある。本研究では、一被験者内における敬語の知識と運用の関係を日本語能力別にみるため、日本語能力に幅を持たせた。

3.2. 実験の方法

自然発話の採集では、統計的な分析の対象となりうるような用例を集めるのは非常に困難である。そこで、本研究では、自然発話に近い形で、なおかつ統計的な分析も可能となるようにデザインした、インタビュー形式による擬似自然発話実験を行い、それを質問紙による敬語テストと比較した。

本研究は、まず敬語のペーパーテストを行い、同じ被験者に対して1ヵ月後にインタビュー実験を行うという形式をとった。ペーパーテストとインタビューを1ヶ月もの期間をおいて別の機会に行ったのは、ペーパーテストとインタビューとで全く同じコンテキストと項目を用いたためである。日本語能力テストはペーパーテストの形式をとり、インタビューと同じ時に行った。

本研究では、敬語の中でも尊敬語と謙讓語を対象とした。尊敬語に関しては、五段動詞として「行く」「言う」「帰る」「読む」「書く」の5つを、一段動詞および変格活用動詞として「見る」「食べる」「つける」「やめる」「する」の5つの動詞を項目として取り上げた。このうち、「行く」「言う」「見る」「食べる」「する（協力す

る)」の5つを謙讓語の項目としても取り上げた。残りの5つは、難易度がほぼ同じであると考えられる「待つ」「返す」「届ける」「知らせる」「借りる」を、謙讓語の項目として採用した。

まず、ペーパーテストは、一文ずつコンテキストを示したうえで、辞書形で提示した動詞を適切な表現に直すという形をとった。例えば、「初対面の大学の教授にたずねます」というコンテキストで、「秋の学会へ（行くか）」の下線部を正しい形に直すというものである。項目は、尊敬語10問、謙讓語10問、ダミー10問の合計30問である。これらをランダムに並べて被験者に提示した。

一方、敬語インタビューは、前述のように、ペーパーテストを行った1ヵ月後に同じ被験者に対して行った。この実験では、敬語の知識に対する運用を測定するという意味で、より自然な発話に近い形式を採集することを目的とした。しかし、完全な自然発話とすると、実験者側が意図するような発話を得られない可能性が高い。そのため、状況と用いる動詞を設定した上で発話を促すという形式をとった。

このような、より自然な形で尊敬語および謙讓語の発話を促すためには、尊敬語と謙讓語の実験を別のスタイルで行う必要があった。つまり、尊敬語は主語を話し相手に、謙讓語は主語を自分自身にしなければならないことから、場面を2つに分けた。実験者は、被験者の話し相手である先生と、カードを提示する補佐役の計2人である。話し相手となる人物は、被験者が最も敬語を使う可能性が高いと思われる大学の教授（荻野・金・梅田・羅・盧，1990）とした。被験者の話し相手としては常に同一人物を設定し、話し相手の属性の微妙な違いによって被験者の反応が異なる可能性を排除した。補佐役は韓国語母語話者で、実験の指示はすべて韓国語で行った。従って、被験者は実験の方法を十分理解することができたと考えられる。

まず、尊敬語について実験を行った。はじめに被験者に、教授にインタビューをしてほしいと伝えてメモ用紙を渡し、教授の答えを書き留めるように指示した。その際、すべての質問項目が書かれた質問紙をあらかじめ被験者に渡しておく、回答を考える時間を与えてしまい、相手の発話に応じて瞬時にかつ臨機応変に答えを作り出さなくてはならない自然発話との乖離が大きくなる。そこで、質問項目を書いたカードを一枚ずつ被験者に手渡し、被験者はその都度それを見て先生に質問するという形式とした。カードには、ペーパーテストと同様に、用いる動詞の辞書形を明示し、それを適切な形に変えて先生に質問するように指示した。

次に、謙讓語について、尊敬語とは異なる形式で実験を行った。謙讓語は、主語が被験者自身でなくてはならないため、話し相手である大学の教授と被験者とのやり取りの中で、自然な形で謙讓語を使うような状況となるようにした。教授には、

あらかじめせりふとせりふの順序を指示し、すべての被験者に対して同じ対応をするように心がけてもらった。被験者には、教授の発話に対する反応を書いた紙を良く見えるようにその都度提示した。紙には、ペーパーテストおよび尊敬語のインタビューと同様に、用いる動詞を明示した。尊敬語と謙譲語とで用いる動詞をそろえ、同様に辞書形を紙によって提示していることから、尊敬語と謙譲語の実験の条件は同じであると考えられる。被験者は、教授からの働きかけがあるたびに、紙に書かれた指示に従って即座に適切な表現を考えて対応した。

3.3. 得点化

得点は、丁寧度が高いものを用いるほど高くなるように計算し、不正解は0点とした。しかし、尊敬語と謙譲語とでは丁寧度のバリエーションが異なるため、得点化も異なる。尊敬語については、「です・ます」のみで答えているものは1点、「れる・られる」は2点、「お～になる」および「いらっしゃる」などの動詞1語からなる交替形式の尊敬語は3点とした。謙譲語は、「です・ます」が1点、「お～する」および交替形式の謙譲語は2点とした。

4. 全体の分析

4.1. 表現の得点からみたペーパーテストとインタビュー

尊敬語の項目ごとの素点の最高点は、3点×24人=72点である。一方、謙譲語は2点×24人=48点である。したがって、分析の便宜上、謙譲語の得点に3/2をかけて点数を揃えた。表現の得点の平均値と標準偏差は表1に示した。

表1 ペーパーテストとインタビューに関する分散分析の結果

指標の種類	ペーパーテスト		インタビュー		2×2の分散分析の結果		
	尊敬語	謙譲語	尊敬語	謙譲語	尊敬語・謙譲語	ペーパーテスト・インタビュー	交互作用
表現の得点	<i>M</i> 31.33	34.50	29.27	31.70	<i>n. s.</i>	<i>n. s.</i>	<i>n. s.</i>
	<i>SD</i> 5.43	3.84	2.50	4.50			
エントロピー	<i>M</i> 1.94	2.19	1.81	3.53	$F(1, 18)=26.48,$	$F(1, 18)=18.07,$	$F(1, 18)=26.38,$
	<i>SD</i> 0.48	0.66	0.60	0.34	$p<.0001.$	$p<.0001.$	$p<.0001.$

注1：刺激項目による反復測定分散分析であるため、項目数20で行っている。被験者数は24名である。

注2：*M* = means. *SD* = standard deviations.

2 (尊敬語・謙讓語) × 2 (ペーパーテスト・インタビュー) の分散分析を、項目の得点について行った。その結果、尊敬語の方が謙讓語よりも、また、ペーパーテストの方がインタビューよりも得点が高いであろうという予想に反して、表1に示したように、尊敬語と謙讓語の主効果は有意ではなく、またペーパーテストとインタビューの得点の主効果も有意ではなかった。さらに、両変数の交互作用も有意ではなかった。つまり、文法的に正しいかどうかを基準として見た場合、本実験の表現について、尊敬語だけでなく謙讓語も、またペーパーテストだけでなくインタビューの場合も、同様のレベルで正しい表現が用いられていた。

また、尊敬語と謙讓語の間に差がなかったのは、本実験で用いた動詞を、活用形や接続可能な敬語などを考慮して統制した結果、尊敬語と謙讓語の両者において使用頻度の高いものになったためであると考えられる。また、ペーパーテストとインタビューの得点の間に差がなかったのは、非常に興味深い結果であった。これは、図1のモデルで示したように、単に文法的に正しい形を産出できるかどうかという問題に限定すると、「書く」と「話す」ことの間には特に差はないということだと考えられる。

しかし、第二言語教育の現場において、同じ第二言語学習者の中でペーパーテストと会話のテストの得点が必ずしも一致しないということはよく知られている。では、両者の違いは何に起因するのであろうか。以下に別の観点からの分析を行った。

4.2. エントロピーからみたペーパーテストとインタビュー

エントロピーとは情報量の尺度の一つであり、平均情報量を意味する。ある情報量が与えられ、それを解釈するとき、可能な答えが確率的に等しく N 通りあり、どれが正しい答えかわからない場合、その答えを確定させるのに必要な情報量は、 $\log_2 N = S$ ビットで表される。ある情報を受信するにあたり、受信前は後に比べて S ビットだけエントロピーが多かったという。従って、エントロピーの増減は、「あいまいさ」や「乱雑度」の増減を意味する指標であり、以下の式で計算される。

$$H = -\sum_{j=1}^J p_j \log_2 p_j$$

本研究では、答えとして得られた表現をもとにその種類と頻度を計算して、動詞ごとのエントロピーを計算した。計算方法は以下の通りである。例えば、本研究では、インタビューの「見た」の疑問形の謙讓表現は、6種類が使われた。24名の被験者のうち1名だけは「ご覧になったですか」という表現を用いたので誤りとなり、頻度の集計から除外される。そのため、全体の延べ頻度は23である。まず、各表現の使用頻

度を計算し、それぞれの使用頻度を全体の延べ頻度の23で割って比率を出す。各比率の底が2の対数を算出する。例えば、「見ましたか」であれば、使用頻度が10で、比率は10を23で割った0.435である。この対数は-1.202となる。そこで、比率の0.435と対数の-1.202を掛けて-0.522を出す。比率と対数の積から得られる値をすべて足して値を正に変えた(-1を掛ける)のがエントロピーである。なお、表現の数を数える際には、終助詞のような付属語などが1文字でも異なっているものは別の表現とみなした。エントロピーの平均値と標準偏差は表現の得点と同じく表1に示した。

表現ごとに算出したエントロピーについても、2(尊敬語・謙讓語)×2(ペーパーテスト・インタビュー)の分散分析を行った。その結果、表1に示したように、尊敬語と謙讓語の主効果が有意であり [$F(1,18) = 26.48, p < .0001$], またペーパーテストとインタビューの主効果も有意であった [$F(1,18) = 18.07, p < .0001$]。さらに、両者の交互作用のどれにも有意であった [$F(1,18) = 26.38, p < .0001$]。つまり、表現のバリエーションの多さという観点から分析すると、尊敬語よりも謙讓語の方が、また、ペーパーテストよりもインタビューの方が有意にエントロピーが高いという結果であった。交互作用が有意であったことは、インタビューの謙讓語のエントロピーが顕著に高かったことを示している。ペーパーテストよりもインタビューの方がバリエーションが出やすい状況にあるとはいえ、尊敬語はペーパーテストとインタビューの差がわずかであることを考慮に入れると、謙讓語のエントロピーの高さは特筆に値する。

5. 被験者の分析

5.1. 各被験者内の日本語文法能力と尊敬語および謙讓語の知識と運用との相関

日本語文法能力と、尊敬語および謙讓語のペーパーテストとインタビューの間の相関係数を算出した。ピアソンの相関係数を韓国語系日本語学習者の24名について算出したところ、表2に示したように、尊敬語のペーパーテスト ($n = 24, r = .690, p < .01$) と謙讓語のペーパーテスト ($n = 24, r = .805, p < .01$), 尊敬語のインタビュー ($n = 24, r = .667, p < .01$) と謙讓語のインタビュー ($n = 24, r = .772, p < .01$) のいずれも、日本語文法能力との間に高い相関を示した。また、ペーパーテストの尊敬語と謙讓語を合わせた得点 ($n = 24, r = .796, p < .01$) でも、インタビューの同様の得点でも、文法能力と有意 ($n = 24, r = .752, p < .01$) な高い相関を示した。さらに、尊敬語のペーパーテストとインタビューを合わせた得点 ($n = 24, r = .759, p < .01$), 謙讓語の同様の得点 ($n = 24, r = .835, p < .01$) でも、文法能力と有意に高い相関を示している。このことから、ペーパーテストだけでなくインタビューも、

日本語の文法能力に支えられていると考えることができるであろう。とりわけ、謙讓語についてその傾向が強いのではないかと思われる。しかし、相関係数はあくまで2つの変数間の関係を示すのみであるので、後に行うパス解析の結果を待たなくてはならない。

表2 日本語文法能力と尊敬語・謙讓語のペーパーテスト・インタビューとの相関

変数	満点	平均	標準偏差	文法能力との相関	
ペーパーテスト	尊敬語	30	19.58	7.19	.690 **
	謙讓語	20	14.38	4.40	.805 **
インタビュー	尊敬語	30	18.29	7.91	.667 **
	謙讓語	20	13.21	3.73	.772 **
ペーパーテスト	50	33.96	10.67	.796 **	
インタビュー	50	31.50	10.84	.752 **	
尊敬語のペーパーテスト・インタビュー	60	37.88	13.49	.759 **	
謙讓語のペーパーテスト・インタビュー	40	27.58	7.69	.835 **	

注1: n=24. ** p<.01.

注2: 日本語文法能力テストは、50点満点で、平均が28.00、標準偏差が11.17.

さらに、各被験者内の日本語文法能力とペーパーテストおよびインタビューとの関係を図2のようにプロットした。その結果、ペーパーテストとインタビューとでは若干異なる傾向を示した。ペーパーテストの場合には、日本語文法能力の下位グループは、日本語文法能力の方がペーパーテストよりも得点が高かった。それに対して、日本語文法能力の上位グループは、日本語文法能力の方がペーパーテストよりも得点が高い学習者の数と、ペーパーテストの方が日本語文法能力よりも得点が高い学習者の数がほぼ同じであった。このことから、ペーパーテストの成績は、日本語文法能力がある程度高くなると伸びないのだと考えられる。一方、インタビューの場合には、日本語文法能力の下位グループは、日本語文法能力の方

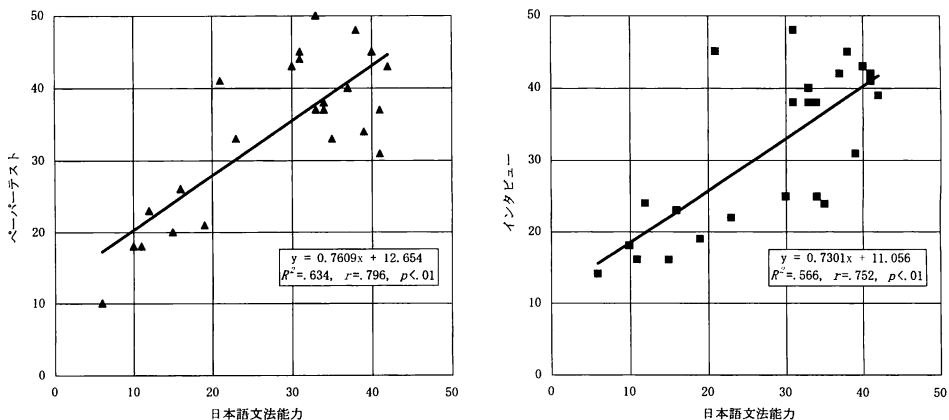


図2 日本語文法能力とペーパーテストおよびインタビューとのプロット (n=24)

がインタビューよりも得点が高い学習者が多かった。それに対して、日本語文法能力の上位グループは、インタビューの方が日本語文法能力の得点よりも高い学習者が多かった。

5.2. 被験者内におけるペーパーテストと運用の関係のプロット

次に、24名の被験者内におけるペーパーテストとインタビューの関係を検討した。ピアソンの相関係数を求めたところ、ペーパーテストとインタビューの間の相関が有意であった [$n=24$, $r=.829$, $p<.001$]。また、表3に示したように、尊敬語と謙讓語を別にして相関係数を算出したところ、すべての組み合わせにおいて有意であった。

表3 被験者内の相関係数

		ペーパーテスト		インタビュー	
		尊敬	謙讓	尊敬	謙讓
ペーパーテスト	尊敬	—			
	謙讓	.68 **	—		
インタビュー	尊敬	.60 **	.83 **	—	
	謙讓	.77 **	.79 **	.70 **	—
	平均	19.58	14.38	18.29	13.21
	標準偏差	7.19	4.40	7.91	3.73

注: $n=24$. ** $p<.01$.

そこで、次に各被験者のペーパーテストとインタビューの得点をもとにしてプロットを行った。これによって、各被験者内におけるペーパーテストとインタビューの関係を明らかにすることができよう。ペーパーテストとインタビューの得点を総合的に見ると、図3のようにほぼ同一線上に並び、ペーパーテストとインタビューの相関が被験者内で高いことがわかる。

また、図4と図5のように尊敬語と謙讓語とを分けて行ったプロットでも、同様の傾向を示している。尊敬語も謙讓語も、得点の下位グループはペーパーテストの方がインタビューよりも得点が高い学習者が多かった。それに対して、上位グループはインタビューの方がペーパーテストよりも得点が高い学習者が多かった。日本語文法能力と、ペーパーテストおよびインタビューの得点の間の相関が高かったことを考慮に入れると、使用頻度の高い尊敬語と謙讓語については、日本語文法能力があまり高くない段階では話すよりも書くほうが得意で、日本語文法能力が高くなると書くことよりもむしろ話すことのほうが簡単である場合があることを示唆しているとも考えられる。

また、尊敬語のペーパーテストの得点が低いにもかかわらず、インタビューの得点が高い学習者が若干見られた。学習者Aは、尊敬語のペーパーテストは12点とい

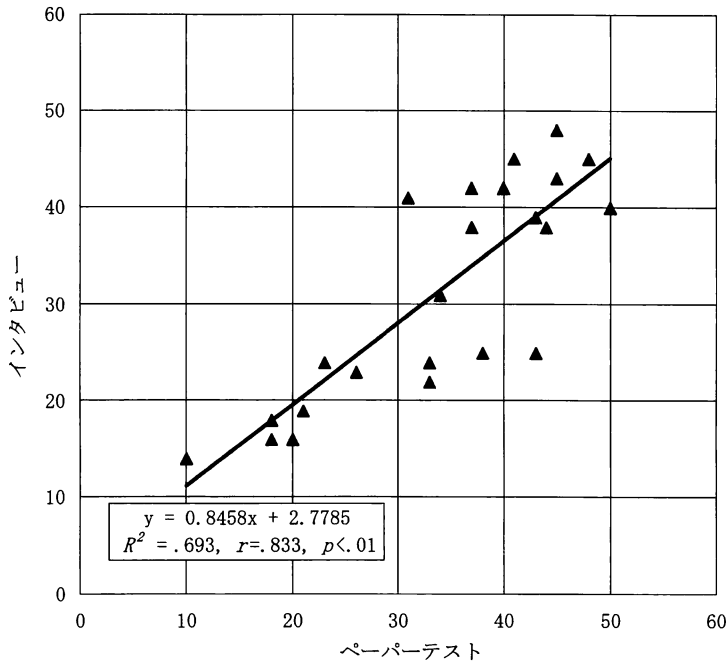


図3 被験者内における尊敬および謙讓表現のペーパーテストとインタビューのプロット

う低い点数であるにもかかわらず、インタビューの得点が27点という高得点であった。回答を見ると、学習者Aは、ペーパーテストのときのみ10問中6問も「お書きになりましたか」「おやめになりました」という過剰敬語の誤答をしているため、ペーパーテストの得点が低くなっていた。学習者Aの日本語能力テストの得点は、50点満点で41点という高得点であった。インタビューでは、話し相手とのやり取りの中で即座に回答しなくてはならないため、日常的に用いている正しい表現が表れやすかったのであろう。それに対して、回答を考える時間に若干余裕があるペーパーテストにおいては、敬語を重ねて用いた方がより丁寧になるのではないかという意識が働いたため、このような誤答が表れたのだと考えられる。過剰敬語の間違ひは、日本語母語話者にも近年増加していることから、日本語母語話者と敬語を用いてコミュニケーションをとることが多いと考えられる超上級日本語学習者が、日本人母語話者から影響を受けていることも予想される。学習者Bも同様に、ペーパーテストにおいて「お書きになられたんですか」「おやめになられたんですか」のような過剰敬語を10問中4問用いていたため、得点が低くなっていた。学習者Bの日本語能力も決して低くはない33点であった。

逆に、ペーパーテストの得点は高いがインタビューの得点は低い学習者も見られ

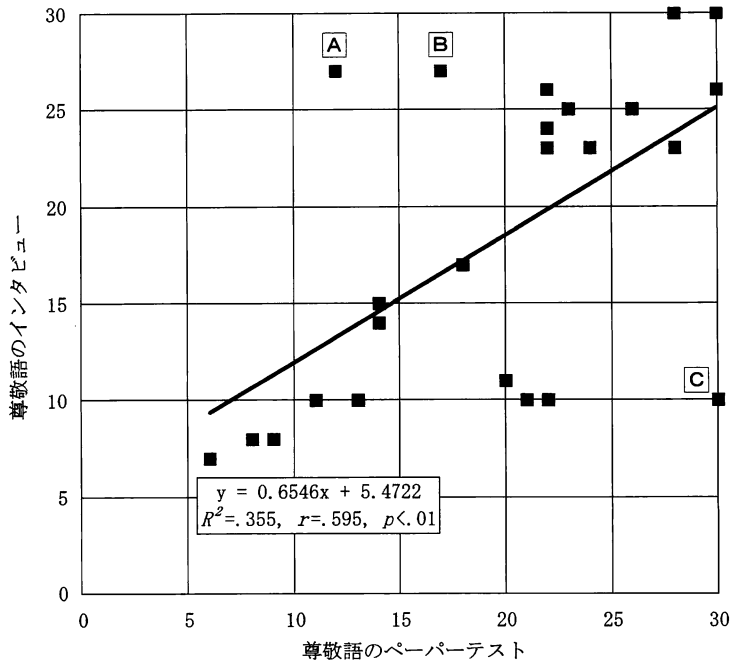


図4 被験者内における尊敬語のペーパーテストとインタビューのプロット

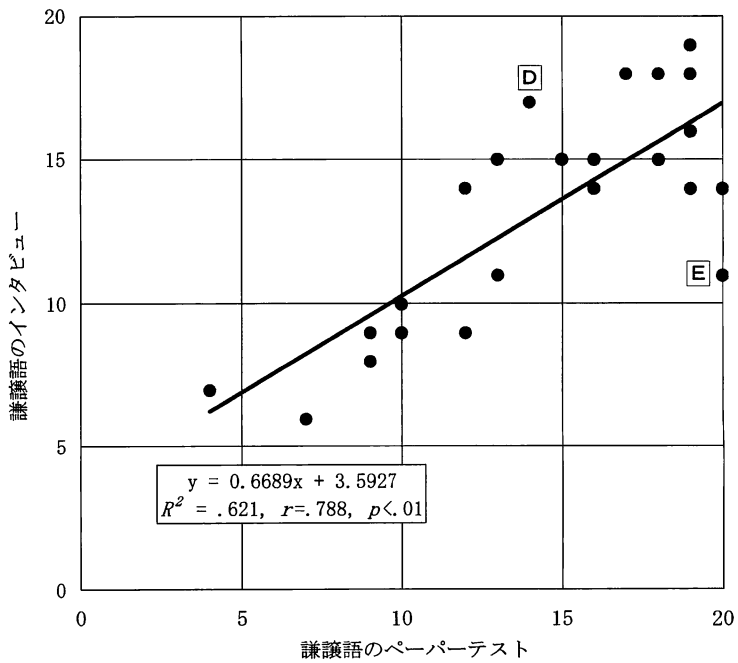


図5 被験者内における謙譲語のペーパーテストとインタビューのプロット

た。学習者Cは、ペーパーテストの得点は満点の30点であったにもかかわらず、インタビューの得点は10点という非常に低い点数であった。日本語能力テストは、30点という低くはない点数であった。回答を見ると、インタビューの場合にはすべて、丁寧度が低いため得点も低い「です・ます」で答えていた。「書く」行為であるペーパーテストと「話す」行為であるインタビューは、言語知識が表出したものであるという点において同質であると考えられる。にもかかわらず両者には、あるパターンを持った顕著な違いが現れた。つまり、知識としては持っているため、現実の会話場面とは異質のペーパーテストには正しい答えを書くが、尊敬語を使いたくはない、もしくは使う必要がないと考えているためか、実際の会話場面に近いインタビューではあえて敬語を用いていないのである。「書く」行為と「話す」行為が異なっている一つの例であろう。このように、学習者個人の中で「書く」行為と「話す」行為の表れ方が異なっている場合には、性格や敬語使用に対する意識など、その他の要因が関係している可能性があるだろう。

謙讓語についても同様に、ペーパーテストの得点が低いにもかかわらず、インタビューの得点がそれほど低くない、また逆に、ペーパーテストの得点は高いがインタビューの得点は低い学習者が見られた。学習者Dはペーパーテストが14点、インタビューが17点であった。回答を検討したところ、ペーパーテストとインタビューの回答傾向は非常に似通っていたが、ペーパーテストにおいて「お知らせします」と書くべきところを「お知らせします」としている箇所があり、このケアレスミスが原因であることがわかった。学習者Eは、ペーパーテストが満点の20点であったにもかかわらず、インタビューが11点という低い点数であった。回答を検討したところ、丁寧度が低いため得点も低くなっている「です・ます」のみで答えているものが10問中5問あり、これが原因であることがわかった。この学習者Eは、尊敬語のプロットでも他と異なる傾向を示した学習者Bと同一人物である。このことから、「書く」行為と「話す」行為の異なりには、学習者の意識や特性などの要因が関係していることが推測できるであろう。

6. 日本語文法能力、ペーパーテスト、およびインタビューの間の因果関係

本研究では、日本語文法能力をペーパーテストで測定している。もちろん、ペーパーテストである以上、言語知識そのものを測定したのではなく、言語の産出の一種であるが、ここでは言語知識をある程度「文法能力」として具現化されたものであると想定して敬語のペーパーテストとインタビューとの因果関係をパス解析で考察した。

パス解析は、重回帰分析のステップワイズ法を逐次的に用い、標準偏回帰係数 (β) を使って有意な因果関係を決めた。基準は、5パーセントの有意水準とした。まず、3つの変数の決定係数あるいは寄与率 (R^2) が、いずれの変数でも.60を上回っているため、被験者数が24名であっても、かなり高い予測ができると想定される。その上で、結果をもとに図6の因果関係モデルを描いた。

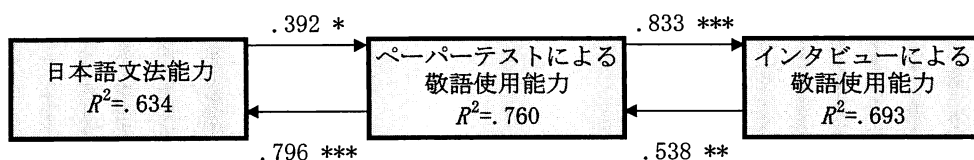


図6 日本語文法能力、ペーパーテストおよびインタビューの因果関係モデル

注1: $n=24$. * $p<.05$. ** $p<.01$. *** $p<.001$.

注2: パス係数は重回帰分析(ステップワイズ法)の標準偏回帰係数.

注3: R^2 =決定係数または寄与率.

興味深いことに、3つの変数について直線的な因果関係が見られた。まず、日本語文法能力がペーパーテストに影響を与えている ($\beta=.392$, $p<.05$)。またその逆方向はさらに強い因果関係を示している ($\beta=.796$, $p<.01$)。次に、ペーパーテストがインタビューに強い影響を与えている ($\beta=.833$, $p<.05$)。またその逆方向も強い因果関係を示している ($\beta=.538$, $p<.01$)。ここで注意しておかなくてはならないのは、日本語文法能力からインタビューへの有意な因果関係が双方について見られないことである。つまり、日本語文法能力はペーパーテストに影響し、それがさらにインタビューへと影響することが分かる。しかし、その逆方向もあり、インタビューはペーパーテストに、ペーパーテストはさらに日本語文法能力へと影響している。これは、この因果関係が、ペーパーテストを仲立ちとして相互に関連しあっていることを示している。

以上の結果は、学習の進展に二つの方向性があることを示唆している。一つは、会話での敬語使用能力の向上は、文法能力の向上があつてはじめて成り立つということである。つまり、日本語の文法習得から、文字言語での敬語理解能力を媒介として、現実の会話での敬語能力の向上という学習の方向性があると考えられる。これに対して、もう一つは、会話での敬語使用能力の向上が、文字による敬語能力の向上を促し、文法習得も伸びるという方向である。つまり、現実の生活のなかで学び取る敬語使用能力の向上が、文字言語での敬語使用を媒介として、日本語の文法能力を高めるという方向での学習の進展である。いずれにしても、実生活の会話場

面と言語知識を具現化した文法知識が、文字言語を媒介として影響しあっている。このことは、主に文字言語を媒介として行われている教室での日本語教育が、実は、日常会話のような一般的な言語使用の促進に重要な役割を果たしていることを意味しているのではなかろうか。

7. 考 察

日本語教育などの第二言語教育の現場において、「書く」ことによって測定するペーパーテストの得点は高いが、「話す」ことによって測定する会話テストの得点は低い学習者が存在する。本研究では、言語運用の2つの側面である「書く」能力と「話す」能力の差異について、韓国語系日本語学習者を対象としたペーパーテストとインタビュー実験をもとに分析した。その結果、以下のような知見を得た。

まず、文法的に正しい表現を用いているかどうかを基準としてみた場合には、尊敬語と謙譲語の間にもペーパーテストとインタビューの間にも有意な差はなかった。これは、図1に示したペーパーテストとインタビュー、および言語知識と言語運用のモデルを支持する結果である。つまり、文字言語としての「書く」という行為も、音声言語としての「話す」という行為も、言語知識を基にした言語の産出(production)であると考えれば、同質のものだということである。

その一方で、本研究で表現の数をもとにして算出したエントロピーにおいて、ペーパーテストとインタビューの間に差があった。このことから、ペーパーテストで高得点をとる学習者が会話が上手であるとは限らないというのは、会話場面で用いる表現のバリエーションの少なさから来る印象であると思われる。したがって、第二言語学習者の会話の上手・下手を決める要素の一つは、表現のバリエーションの数であると考えられる。

また、被験者別にみた分析では、日本語文法能力と尊敬語および謙譲語のペーパーテストとインタビューは相関が高いことがわかった。さらに、本研究の被験者については、日本語文法能力の下位グループはインタビューよりもペーパーテストの方の能力が高く、上位グループはペーパーテストよりもインタビューの方が高い傾向にあるということが示唆された。日本語文法能力と、ペーパーテストおよびインタビューの得点の間の相関が高かったことを考慮に入れると、本研究で分析の対象としたような使用頻度の高い敬語について言えば、日本語文法能力があまり高くない段階では話すよりも書くほうが得意で、日本語文法能力が高くなると書くことよりもむしろ話すことのほうが簡単な場合があるとも考えられよう。

パス解析による分析では、日本語文法能力、ペーパーテスト、およびインタビュ

一の3者は、直線的な相互の因果関係を示した。一つの方向は、日本語学習の基本である文法知識からペーパーテスト、そして現実のインタビューという方向である。しかし、もう一つの方向があり、インタビューからペーパーテストを介して日本語文法能力が向上するというものである。これは、文字言語を媒介として、教室内で学習した文法知識と教室外での実際の会話場面とが双方向で因果関係を持っていることを示唆している。このことから、日本語教育の現場においては、文法とコミュニケーション的な訓練のどちらにも偏ることなく、指導してゆく必要があると思われる。

さらに被験者について、ペーパーテストとインタビューの相関が低い学習者の回答を詳しく検討したところ、両者の異なりには、学習者の性格や敬語使用に対する意識などの要因が関係している可能性があることが示唆された。つまり、同じ言語運用に属する「書く」行為と「話す」行為に影響する媒介と環境の一つは、学習者の性格や敬語使用に対する意識などであると考えられる。今後は、これらの要因と敬語の知識と運用の関係を解明する必要があるだろう。

参 考 文 献

- 母育新 (1999). 待遇表現の習得における中国人学習者の問題点と教科書が与える影響. 平成11年度日本語教育学会秋季大会予稿集, 165-170.
- 文化庁文化部国語課 (1999). 国語に関する世論調査—平成11年1月調査. 大蔵省印刷局.
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄・浮田三郎 (1999). 外国人が用いた待遇表現に対する中国地方在住の日本人の評価. *日本語教育*, 103, 40-48.
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄 (2000). 待遇表現の適切性判断における地域差, 世代差および男女差の影響. *読書科学*, 172, 63-72.
- MIYAOKA, Yayoi & TAMAOKA, Katsuo (2001). Use of Japanese honorific expressions by native Chinese speakers. *Psychologia*, 44, 209-222.
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄 (2002). 上級レベルの中国語系日本語学習者と韓国語系日本語学習者の敬語習得の比較. *読書科学*, 180, 63-71.
- MIYAOKA, Yayoi, TAMAOKA, Katsuo & BU, Ikushin (submitted). Acquisition of Japanese honorific expressions by native Chinese speakers with low, middle and high Japanese abilities.
- 文部省学術国際局留学生課 (1997). 今後の留学生政策の基本的方向について (留学生政策懇談会第一次報告概要).
- 中村捷・金子義明・菊地朗 (1989). 生成文法の基礎—原理とパラミターのアプローチ—. 研究者出版.
- 荻野綱男・金東俊・梅田博之・羅聖淑・盧顕松 (1990). 日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法の比較対照. *朝鮮学報*, 136, 1-51.
- 留学生政策懇談会 (1997). 今後の留学生政策の基本的方向について (第一次報告).
- 田中克彦 (1999). 敬語は日本語を世界から閉ざす. *月刊言語*, 28(11), 41-47.
- 辻村敏樹 (1989). 待遇表現(特に敬語)と日本語教育. *日本語教育*, 69, 1-10.